江南の民屋（下）

藤田元春

六　草葺四阿

支那に草屋のあつたことは古い。「史記」には、

堯之有天下也、堂高三尺、采椽不剝、茅茨不剪。

とあつて。天子の堂でさへ、草葺に始まつてゐる漢武帝が泰山につくつた「明堂」なるものは、齊人公玉帶の敎に從つたもので、四面無壁、茅を以て蓋ふとある。蓋し神を祀る靈殿である。草葺の堂上に神坐を設けたのであるが、これは實に古い時代の家の形を寫したものに相違ないらか草葺の木造家屋といふものが、古い時代に宮室であつたと考へられる。しかし支那ではさうした民居の外に、土を以て塗る所の民家もあつたと見える詩經の國風七月の詩には、

十月穹窒（シテ）熏鼠（ヲ）、塞（キタマドヲフサグ）向墐（スルヲ）戶。

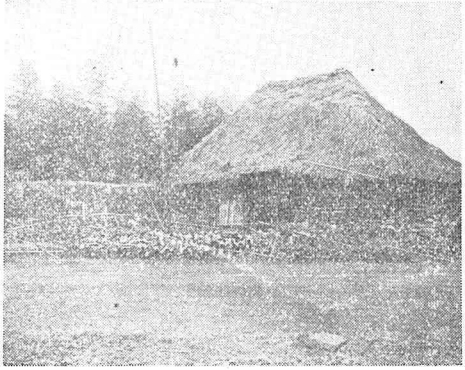
畫爾于茅。宵爾索綯。亟其乘屋。其始播百穀。

と歌つてゐる。前者は寒い北風を防ぐ爲めに、土を塗る、穴居式の民屋であり。後者は茅をとり、繩をぬひ、屋にのせるのであるから、草葺のことであらう。

さうした國初からの草葺が今も猶支那には多い草葺の材料は地の宜に從ふのであるから蘆でも稻でも麥藁でも何でもよいが、現在江南には稻藁を以て葺いたのが多い。黃埔江を上海に溯るとき左側の方に既に矩形四阿の稻藁の大屋根をみるが、それは氷室であつて民家ではない。民家の草屋は上海から杭蘇に向ふく沿線、江岸では南京鎭江の間

九江の龍開河のデルタ、漢口、武昌の郊外、至る所で見られる。密集部落では切妻が多いが、農村の草葺は主として四阿である。

第三圖は西湖淨慈寺の附近で見たものであるが四阿の草葺で棟にオサヘ（竹）三本、針目覆（鰹木）が三つのつてゐる。前面入口の所が凹字形に切つてあるのが珍らしいが、全體としては全く我國の民家の形に共通する。我國では椽とか障子とかいふものが近世に發達したが、昔は四面壁が多かつたやうにこの家も周圍は柴の縛壁（タツコモ）で

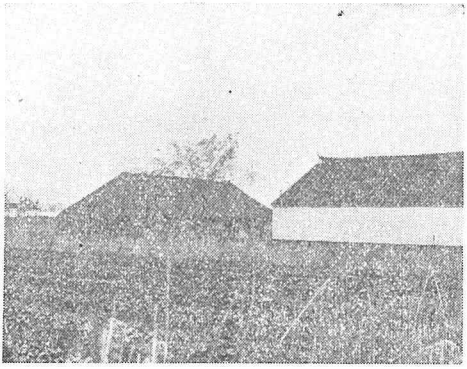


第三圖　草葺四阿

竹でしばつてある。隣の藪敷との境には、土と石との垣があるそれさへ草葺である。屋敷の中に山東菜が耕作されてゐて戸口に近く井戸がある。外觀から明なやうに、この民屋は內部を三分してゐる。正面戸口を入れば土間である。（稀に板張である）かうした正面を入ると、その突當りに板が張つてある。卽板壁で、之に山水圖や古い書畫の長い掛軸があり、その前に卓子（方形五尺內外）を置き、椅子が二三脚ある。又この室の壁の根にも低い腰掛が置かれる。これはこの家の正房であり、食堂であり、客室であるが、同時に女が支那靴などを縫う仕事場ともなる所である。右の方は厨房である。正面板壁の裏は寢臺、もしくは物置であり、左の方は奥で、寢室である。大さは間口六間奥行二間前後で、四周殆ど窓を持たぬのが例である。日本の民家の戸障子、廻り椽などを持つやうになつたのは、ずつと近世のことであつて、我國

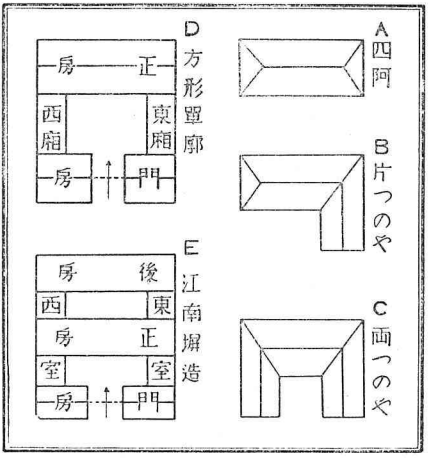
でも昔はかうした形のものが多かつたのであらう

第四圖は蘇州城外でうつした草葺の四阿であるこれは田地の堺に竹柵がある。草屋の邸地にも北と西とに竹垣がある。入口は圖に見る一ヶ所丈けで、四方全く土壁である。日乾の磚瓦と石とを重ねてゐるこの家は長い恐らく室内の半分は物入れであらう。前面に見ゆる瓦ふきは隣家である。これは土藏でなく、中に人が生活してゐる。窓がないのが面白いことである。



第四圖　草葺四阿

上記二例は最も簡單な四阿方形に近いものであるが、松江附近の村にゆくとこの一邊に更らに鍵の手に直角にのばした「字形の民屋が多い。それが更に進んで、左右に角を出すと冂字形の屋根になる。南面、四阿の平入に對して東房、西房、が出來たのである。



第五圖

房の前面は切妻になつたのが多い。日本では「字形のものを「つのや」といひ、兩つのやを、九州邊で「クドヅクリ」といつてゐる。

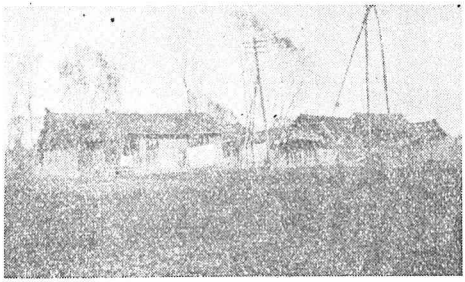
このクドヅクリに更らに前に室をつくれば方形

になつて、正面左右に門房が出來る。更らに後方に一室をつくれば、後房になる。かうした四方を壁でとりまいた中に、並行した三棟を包んだ民家は、江南の富貴な土豪の邸宅に多い、さうしたものは多くは瓦葺であつて、外觀全く一變する。これは後節に讓る。

とにかくさうした最初の一棟に止まるもの、ツノヤ建にするもの、クドヅクリにするもの、何れも草屋の程度に止まる民家は、松江から嘉興の田舍に甚だ多い。それが戸毎に垣内式の邸地をもつて、森の中に孤立するのである。

七　切妻草ふき

一つの棟が四阿の正房であつて、それから前後又は左右に棟を增加する外に、たゞ切妻の横に更らに第二の棟を並行にする場合も發生する。これはその邸宅地の面積の關係であらう。第六圖は漢口市郊外に存する農家である。蔬菜園を耕すのにかの棹をつくつてゐるのが面白い。圖に見るのは二戸であつて、各戸いづれも竹柵をめぐらしてゐる。疎らに楊柳が栽はつて過去の森の形をしめす。左の一方は本宅の左に猶一棟の房を出してゐる。右の一宇は「字形つのやで、前庭に小屋をもつ。廣さは一邸宅百坪内外である。かうした切妻草葺で貧民の上層であらう。中には草の代りに切妻瓦葺にしたのが多い。



第六圖

八　江南民家の瓦葺

支那で屋に瓦を用ひたことの起原は古い。考工記に「葺屋三分、瓦屋四分」といつて。瓦屋根は妻の長さの四分一の高さにする、卽草屋よりも緩勾配にすることが書いてある。山東地方にある漢代の畫像石などにも、瓦葺の畫があるが、いづれも貴族の生活らしく見える。庶民の居宅ではない。從つて民家の瓦になつたのは、ずつと後世である宋史外戚傳に鄭興裔が楊州の知事となつて、その地の茅舍を瓦にかへしめたことが、德政として特筆される程であるから、十一世紀以後にかやうに瓦の民家が流布したと見てよい。

上代の瓦は、日本の所謂本瓦葺である。平瓦と丸瓦とを交互に重ねる。その大さ、重さ共に重厚であつたから、殿堂寺院の類には用ひられても、庶民には之を用ひかねたであらう。何となれば支那は前述の如く、材木の少い國である。餘程古い頃から民家の柱楹の細かつたことは、さきの鉅鹿の發掘場でもわかる。北支那では唐宋時代既に高梁に土の壁、土の屋根であつたらしく、大さも四疊半内外の小さい部屋一つか二つであつたことは「六典」に六品でも、三間五架の堂を許すに過ぎず庶民は四架といふ程度であつたからである。明代になつても、庶民の定制は、三間五架とあるに止まる。（拙著日本民家史參照）、三間五架といへば四疊半三房位しかとれぬであらう。事實柱が細くて短いから平常から材木飢饉の地として、これは餘儀ないことであつた。

今日南支那は、湖南、江西、福建などの山地から木材の供給され易い土地であるが、しかしかの楊子江の大筏として、流を下る材を見ると明かなやうに、決して巨木ではない、贛江により鄱陽湖を下つてくる、江西の材のごときは特に細い。漢口に集まる上流の筏には、やゝ巨木もあるが、それでも多くは徑四五寸、長三、四間の丸太である。

勿論棺材にする木には太い立派なものを見うけるし紫檀や黒檀の類には巨幹もあるが、軟木は松杉、檜、椹、いづれも細い。さうした細い木で民屋にする、アンペラ家のフレームの柱などは徑二寸以下の間伐に過ぎない。相當立派な家でも柱や梁や棟や桁、さては合掌、極いづれもが細い丸太である。上海馬四路杏花樓の如き煉瓦造の壯大な料理屋でも、丸い細い木が使つてある。我國の民家のやうな角柱の節無しの三間も四間も通つたもの、時には徑一尺にも達する大極柱、もしくは大和の「烟りがへし」などと稱する太い桁などは、それが殿堂でない限り、民家にはないといつてよい。

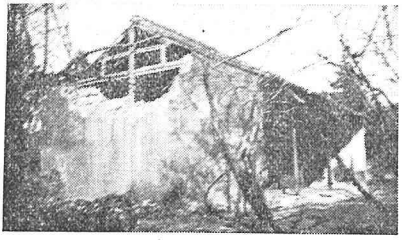
かやうに木材が脆弱である以上、民屋を瓦にすることは容易でない。茲に於てか江南の瓦葺にはそれに應じた工夫がある。平瓦とか丸瓦とかいふ古典的なものは使用できぬ、そこで第一に平瓦といつても、神戸の瓦煎餅のやうに、薄くて小さく

て輕いものを必要とする。第二に屋上に之をのせるために、我國のやうに土を敷くことが出來ないそこで江南の民家は屋根の極（それも細い徑一寸位の丸太が三寸置きに並べられる）を間狹にして板をはらず、土をのせず、直ちに薄い平瓦をのせるのである。二つの極間の表面には、同じ平瓦を牝牡にしてのせる。棟には我國のやうな鬼瓦又は紐瓦、などをのせないで、平瓦を何枚となく縱にして漆喰でかためるのである。屋根裏から瓦が見えることは第七圖によつて證される。これは武昌大學の廊下である天井をはるといふことは客室などの事で、民家の房はさうした設備がないのが多い。

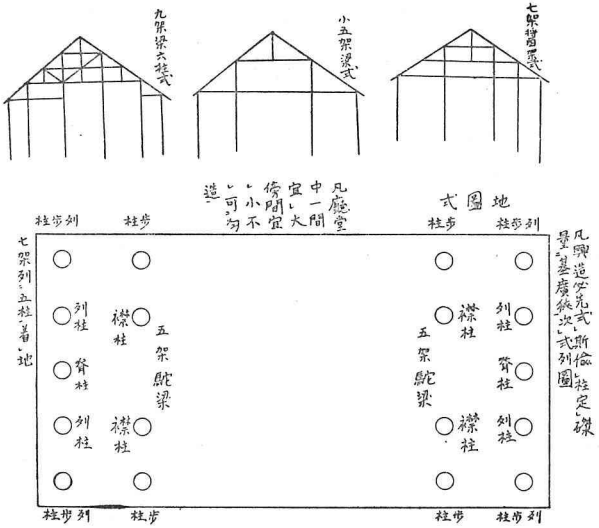
第七圖　武昌大學の廊下

九　瓦舍の構架

民家のあるものは、外觀は立派な白壁であり、煉瓦もあれば磚壁もある。しかしさうした內部にはやはり、細い丸太の小屋組があるので、屋根を細い柱でうけてフレームをつくつて、それを外から煉瓦でかくすのである所謂木骨瓦壁である場合が多い第八圖は寫眞がまづいけれども、さうした煉瓦の破れから、內部の小屋組をしめした圖である。南京の町はづれで撮影したものである。瓦屋根の裏に板がない。木が細いからその桁は二本にしてある。丸太である。かうした小屋組を「三間七架」の切妻といふのである。前面に細い丸柱が三本あるから、三間、切妻の棟に並行した小屋梁の數が前後に三つ宛、棟を合せて架が七つ、故に七架といふのである。これがかの唐時の六品の堂の大さであり、明代からの民屋、三間五架よりも、前後に二だけ架が多いの



第八圖　瓦舍の小屋組



第九圖

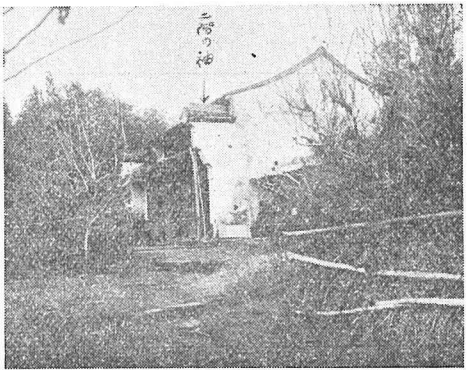
である。しかしこの前後の二架は庇であるから、堂としてはこれで卽ち三間五架である。

かうした小屋組を我等は和式小屋組といつて、日本建築の傳統的のものとしてゐるのであるが、それは日支に共通した民屋の構架である。南京や上海の立派な瓦壁の家にもこの和式小屋組は多いのである。

この小屋組の事は、「昆陽漫錄」に、七架列式、草架式、擠架式などと稱して、その變種を圖示すると共に列柱の位置を記してゐること圖の如くである。予は讀者がこれによつて、さうした民間の小屋組が日支に共通する所以を明に理解されたことゝ思ふのである。

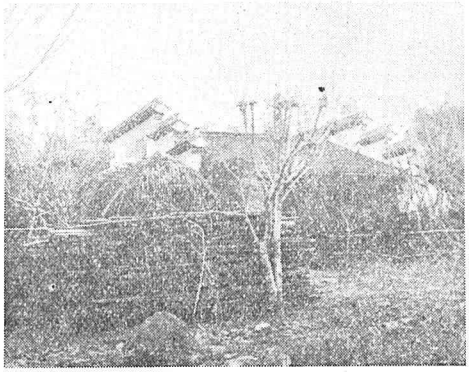
一〇　江南の瓦葺切妻

さてかやうにして現在では江南の民家に三間七架以上九架などもあるが、面白いことにはこの平入の瓦葺に限つて、屋より更に高い防火壁をもつことである。これは、我國では瀬戸内の瓦葺、たとへば阿波の脇町などにも存する形の防火壁であり、同時に大和では茅葺の左右にこれをつけて、「高塀造り」と稱してゐる建方である。日本の高塀は多く屋根の形に從ふのであるが、江南には屋根以上に三段構になつたものが多い。第十圖はやはり三間九架の民屋で切妻瓦葺でさうしたものゝ標式である。第十一圖は同じく三間七架の切妻で二階のある民家である。この二階には特に防火壁が凸出して、袖になつてゐる。この二



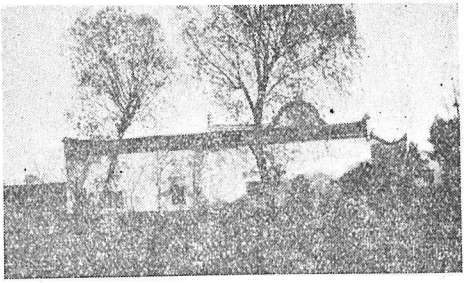
第十圖　標式的民家の高塀

階につく形は大阪や、その附近の町家にも多い所の、目かくしであり、火よけと同じ形式であるがかうした外觀が更らに高度に發展すると、門房、正房、後房の三棟がいづれも側面に美はしい白壁の高い防火壁をもつのである、第十二圖はその標式的のものであり、江南民家の中に於て特に旅客の目をひく型式である、第十三圖も亦同種類の型である。前者は蘇州の郊外で、後者は漢口の郊外で見たものである。



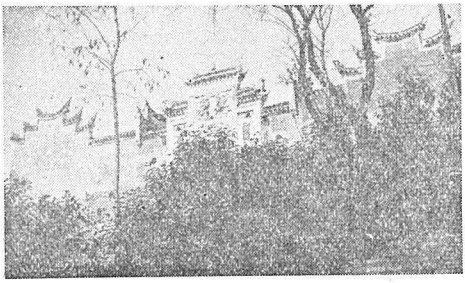
第十一圖

一一　入母屋のつのや（瓦葺）



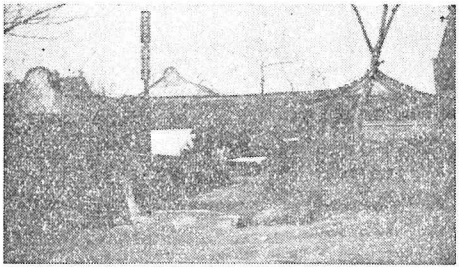
第十二圖　江南民屋の高塀

いふと、これ又共通に存在する。瓦葺切妻を塀造りにすれば、白壁が垂直に、棟の方向に直角に聳立するから、そこに「シコロ」を出すことが出來ない。しかし日本の民屋に四阿、切妻、塀作り、クドヅクリがあるやうに江南にも同樣の民屋があるそこで我國近畿の特色とも見らるゝ草葺の入母屋は先方に無いかと

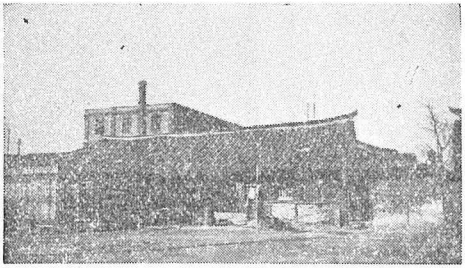


第十三圖　江南高塀の家

しもしもこの白壁のかはりに庇をつけるならば、入母屋にならざるを得ない。第十四圖はさうした入母屋單層瓦屋の一民家で、上海郊外で撮影したものである。この瓦は日本の本瓦葺に似てゐるが、實はさうでなくて薄い輕い弧瓦を、前述したやうに棰の間に並べ、その上に同形の弧瓦を牝牡に重ねたものである



第十五圖　瓦葺クドヅクリ



第十四圖　入母屋瓦葺

棟の半分は平瓦と漆喰で押へてゐるが、他の半分は平瓦を縦に何枚となくたてゝ、漆喰固にしてある。屋端に下り棟と隅棟があつて、入母屋になつてゐる。この家もやはり一棟を三分して、正面入口の中は土間で客室、向つて左に厨房、向つて右にレンヂ窓がある、寢室である。入母屋の庇の下にも入口がある、側室といふべきものであらう。三方に窓がないから　女は戸口で仕事をしてゐる網代の竹壁や、竹の垣も我等に目慣れたものである。それよりもこの家の全體のプロポーションの低くて、屋根のカーブの緩かにかぶさつた形は、何となく大和に多い天平時代の古建築の氣分を彷彿するではなからうか。

第十五圖も同樣に上海郊外の舊い民家である。これは所謂瓦葺のクドヅクリである。南面してゐるので東房と西房とが兩方に出來た。この家も正面入口の前に卓子を出して、蒲團を修繕してゐた

中庭に洗濯ものが乾してある。野菜がつくられてゐる。東房前面は入母屋で、西房前面は塀造りに限られてゐる。軒のひくい光線の少い、古色蒼然たるものである。前面に猶過去の森の木をのこし枳殼のやうなものゝ生牆が半ば枯れたので細い竹で柵にしてある。邸前土橋の立石は境界標である方十五間内外の一區であつた。

一二　江南の山村

以上採訪した例によつて、民屋の我國との類似をのべたと思ふ。さうしてそれらの各種類の民屋型が、大小共に類似して我國にも存することを知り得たと同時に、全く類を異にしたものが、江南に存在しないといふことを斷言する。その構架に於ても、建築の技術を彼國に學んだ以上、和式小屋組の名に於て、別段變り樣がないことである。面白いことは我國の大工の用ふる「字形の曲尺と同樣な拐尺（カイ）が彼國にもある。予は漢口でその現存使用してゐるものについて調査したことであつたが、それが關東州にも共通してゐる。「關東廳要覽」に曰く、

拐尺ハ我邦ノ曲尺（かねざし）ト其外形ヲ同ジクスルモ、長枝ニ目盛ナキト、裏目盛ナキガ異リ、主トシテ短枝ノミヲ使用スルガ如シ。角度ハ內角ノミヲ使用ス、而シテ長枝短枝ノ割合ハ一尺二寸ト八寸、一尺七寸ト一尺、一尺ト五六寸位ナリ、用途ハ主トシテ木匠用ナリ。拐尺ノ一尺ハ約我邦直尺一尺トス。

これは面白いことで、いかにも予の漢口でみた工匠尺は、長短の「字木製で、八寸に一尺二寸のもの、短枝に鹿角の目盛が張つてあり。その目盛が日本尺の曲尺に似てゐる。同時にその目が八寸丈しか切つてないのであつた。日本工匠の尺も、短い一邊は八寸、長い一邊は一尺六寸である。（裏目といふものは日本工匠尺に限る）。この拐尺は朝鮮の工匠も同じく用ひてゐる。さうしてその長さは

これ又今の日本尺(曲尺)と略同じであるといつてゐる。これ又昨夏慶州で見た事實である。してみると木匠の尺及その形が、既に日支韓に共通してゐるのも古いことであらう。其の建築物が古典的に類似してゐるのに不思議はない。予は讀者が第十六圖をみて、支那の山村の風致がこれ又我國の山村に類似する一面のあることを認められると信ずる。蓋しこの村の家は瓦葺であつて、ケラバが出てゐること我國のものと全く同じい。

圖は廬山の麓の寒村である。山の木は椹か檜の植林である。切妻の簡單な小屋組の民屋である。草葺の切妻もある。民屋の類似と同樣に、その田の畦と稻の刈跡の配列の類似も成程と合點されるであらうと同時に、田の中にある「稻草堆」「タオツア」と呼ぶ所の、藁の積方の類似をも見逃してはならぬと思ふ。大和國ではこの稻藁堆を「リンザウ」又は「ジンドウ」(廩藏?)といひ、やはり家の近くに置く。岡山では「イナグロ」、信濃では「丸スヽキ」、江州では「ニオン」、越前では「ニウ」といふ。予はこの「リンザ

第十六圖　江南の山村

ウ」の大さが民屋以上にもなつてゐるのを松江及嘉興附近の農家でみた。稻藁の收穫とその跡始末といつた些細の行事に於ても、日支共通の事實がある。しかもこれは殆ど日本全國に分布する形式である。

ジンドウの分布の外、江南に於て氣のつくことは、鷄や犬や、牛や馬、もしくは鵝飼などの類似である。我等の幼時に親しいショコクといつた雄鷄。耳の尖つた倭犬、さうしたものから、ポニーと呼ばるゝ九州馬に似た江南の低い馬、いづれもが共通してゐるのではないかと考へさせられることである。犬養部、鳥取部、曲馬(うまかひ)部などいふ部曲などが彼國との交通の結果出來たことが日本紀の中に散見する。卽雄略紀十年鳥養部を置かれたのは、吳より獻する所の二鵝がその動機であり、應神紀には百濟から良馬二匹の貢があつたので、阿直岐が掌飼に任ぜられたとある。同三十七年には阿知使主等は高麗に渡り、吳に通じたとある。早くから日本と江南とが交通したので、現在でも日本に似た年中行事が、北支那よりも濃厚に江南に存する。江藤榮吉氏の談によると、南支那では家を「カ」といひ、北支那では「ヂヤ」といふ。加の字でも北は「チヤ」で南方音は日本の如く「カ」である日本の正月に用ふる重餅でも、南支に同樣の習慣がある。餅の上に橙を飾り、白柿を飾るが、支那でも大密柑、郎大橘(大吉と音相通ず)と白柿(百事)とを用ひる。蓋し類似の文化現象が江南に多いことは、否定が出來ぬやうである。これは實に餘談に入つたのであるが、予は支那の人文地理上の現象を、更らに廣く深く探究したいと考へる。不充分ではあるが江南の民屋について、觀たこと、思ひついた事を述べて博識の叱正を仰ぎたいのである。(昭和四年一月)